

## 3年生2学期からの受験指導

夏休みの成果を分析し、  
受験本番に1歩ずつ近づかせる夏休み明け 10月  
学習指導精神面と学習面  
両方のケアを

大学入試は3年間の高校での学習の集大成ともいえるが、特に3年生2学期以降の高校生活の過ごし方、学習のしかたがその結果に大きな影響を与え、そこで今回は、3年生の2学期以降、どのような学習指導、進路指導が求められるのか、三つの時期に分けてそれぞれのポイントを具体的に考えてみたい。

なお、国公立大の2次試験、そして私立大一般入試が間近に迫ったセンター試験後には、より生徒1人ひとりに目を向けたきめ細かな指導が必要であり、本企画でも改めて取り上げる予定である。そのため、今回は概要を述べるところとしたい。

夏休み明けに「夏休みは計画どおり十分に勉強できた」と満足して振り返る生徒は、少ないといっているのではないだろうか。「3年生の夏休みは受験の天王山」といつ思いつから、「1日10時間勉強」「5教科総ざらい」などかなり高い目標を立てて夏休みに入るもの

結局計画どおりにいかず、焦ったり落ち込んだりする生徒が多いのが現実だ。2学期初めは大なり小なり、生徒は不安な気持ちを抱えており、その不安をそのままにしておくと、勉強が手につかなくなったり、自信喪失に陥ったりすることもあつた。その辺りのことを念頭に置いて、生徒に接するようになりたい。

現実的には難しいので、昼休みや放課後のちょっとした時間などを利用して、生徒に声をかけるようにするのもよいだろう。

夏休みに勉強が十分にできなかったと落ち込んでいる生徒も、無理な計画が実行できなかったというだけで、実はそれなりに勉強ができていたという場合が少なくない。本人は「できなかった」という失望感にとらわれすぎて、やったものの価値に気がつかないケースである。

そういう生徒にはできなかった分にはなく、できた分に目を向けさせるようにしてやるとうい。夏休みに使っ

た教科書や問題集の学習した部分を確認しながら「これだけのものをやったじゃないか、絶対に力がついているから」と自信を持たせるのも一つの方法だろう。

結局、夏休み明けのスタートにおいては、夏休み中にやったところやっていないところをきちんと把握させ、それに応じた学習計画を立てさせることが重要になる。

テストは点数より  
答案の自身に注目

夏休みに多少なりとも勉強した生徒は、その成果をすぐに欲しがろうとする傾向にある。特に、休み明けの校内テストや模試などでの点数アップを期待するようだ。そして、点数が上がらないと「あれだけやったのにやつぱりだめか」と自信喪失に陥りやすい。その結果、ちょうどこの時期に募集要項が送られてくる推薦入試に心が傾いたりする。

しかし、たとえ数字上では結果が出なくても、答案の自身に夏休み中の成果が隠れていることがある。例えば、休み中に化学の「気体」は勉強を終えたが、「溶液」はまだというケース。休み後のテストで「気体」は答えられた

が、「溶液」はまるでだめだったとする。点数は休み前からそれほど上がらなかつたとしても、心配する必要はない。このあと「溶液」を勉強しさえすればいいのだから解決できる問題である。学習が終わった箇所と終わっていない箇所が、はっきり区別できることが大切なのである。

その点に自分で気づいている生徒もいるが、中には点数だけにとらわれてしまう生徒もいる。そういう生徒にはきちんと気づかせてやるようにして、自信を持たせたい。

模試の場合なら「伸びしろ」を見せたいという方法もある。例えば、このケアレミススをなくせば何点増える、あと1歩の問題ができていれば何点増えると、点数を積み上げてもう一度得点を計算してみる。そのあとで改めて模試の基礎データに当てはめて偏差値や合否判定を出してやる。そうすると偏差値が上がリ、判定もDからCからBというように変わっていくことがある。

具体的に数字で「ミスしない実力がつければここまでできた」という可能性を示してやれば、生徒はあと1歩でどれだけ成績が伸びるのかを具体的に知り、やる気を引き出すことができるだろう。

模試の意味を  
しっかり教える

模試がますます増えてくる2学期は、模試の活用しかたについて、繰り返して指導する必要があるだろう。合否判定のためだけに模試を受ける生徒が少なくないからだ。模試は現在の自分の到達度と弱点を把握するための教材という側面もあり、判定を見るためだけのものではないことをきちんと認識させる必要がある。

教材として考えたとき、模試は受けっぱなしにせず、復習するというのが原則「できた、できない」で一喜一憂するのではなく、まず解答・解説を見ながら自己採点することが大切である。そして、できなかった問題・分野についてはきちんと復習するという勉強の流れをこの時期こそ徹底させる必要がある。

いつまでもなく、模試の問題は、各分野の基本や頻出の箇所を押さえて、そこから出題されているため、類題が本番で出る可能性は十分にある。しかし、それがわかっていない生徒は意外に多い。重要事項を含む問題が出されているのに、やりっぱなし、復習なしではもったいない。その点をしっかり

生徒に認識させたい。

また、模試を通して学ぶと、その定着率も高いようだ。自分で漫然と問題集をやってすぐ解答を見たりするのに比べ、制限時間内に緊張感を持ちつつ解く模試では集中力が要求される。その分、復習をしつかりやれば、出された問題を自分のものにできる可能性は高くなる。

生徒は偏差値や判定に一番関心があるから、数字や判定しか見ない場合が多い。特にマーク模試の場合は答案が返ってこないのが、その傾向はさらに強まる。ある問題ができなかったのは時間がないから、マークのためか、誤答なのか、誤答ならケアレミスなのか、純粹にできなかったのかなど、問題と突き合わせて復習するよう指示しておきたい。また、教科ごとの正答率や問題点の把握、解答のしかたなどについては、成績表を生徒に返す度に何度でも伝えるようにしたい。

地歴公民、理科にも  
比重を置いた学習を

10月ころになると、まだ基礎固めができていないのに、焦りや不安から新しい分野に手を広げたり、難問に取り組もつとする生徒が出てくる。しかし、

実際にはこの時期に難問に取りかかっても歯が立たず、新しい分野に手を広げてさらに焦ってしまつことも少なくない。自分の学習進捗状況をしっかりと把握させ、基礎ができるまでは、遠回りに思っても基礎固めをしつかり続けるように指導する。

また2学期は、それまでの国数英中心の学習から理科、地歴公民にも比重を置いた学習に変えていく時期にあたる。本格的に理科、地歴公民の受験勉強をするのはこのときが初めての生徒があり、どのくらい学習に時間をあてたらいかがわからない生徒がいる。そういった生徒には、まず実際にその科目を勉強させてみて、世界史ならどのくらい、化学ならどのくらいの時間が必要か見当をつけさせる。そこから逆算して、必要な国数英を含めた学習計画を修正することになる。

理科、地歴公民に時間を取られる分、国数英にかけられる時間が減るから、国数英の学習方法の再検討が求められるケースも考えられる。本来なら以上の作業は夏休み中に行いたいのだが、できていない場合は2学期が始まつてすぐ取り組ませたい。

## 最後までがんばる クラス作りを

生徒の勉強の姿勢にクラスの雰囲気を与え影響は小さくない。クラス全体があきらめたり、弱気になったりせず、「最後までがんばる集団」を形成し学習意欲を維持することが求められる。特にこの時期は推薦入試を受ける生徒がいると、早く受験勉強を終わらせたという安易な気持ちで推薦入試を希望する生徒があとに続き、クラス全体が弱気になることがある。そうした雰囲気にさせないで、入試本番に向けて意欲を盛り上げさせる工夫が必要だ。

第1志望ではないにもかかわらず、不安な気持ちから推薦入試に逃げ込もうとする生徒には、既に述べたように「伸びしろ」を見せるなど自信を回復させるようにしたい。

クラスの雰囲気作りの面では、放課後に生徒をいっしょに勉強させて、みんなで勉強するという雰囲気にするのも有効な方法だ。「放課後、図書館や家で勉強するのもいいが、教室に残って勉強したらどうか」「お互いに教え合い

ながら勉強したらどうか」とひと声かけるのもいいだろう。できる生徒には、クラスメートに教えることで自分自身の知識が整理され、理解がさらに深まるというメリットがあることを強調したい。また、家で1人で勉強していると不安になったり落ち込んだりしやすいが、それを防ぐこともできる。

クラスには、「この生徒が勉強を始めると雰囲気が変わる」というムードメーカーがいることがある。いわゆるまじめなタイプの生徒が一生懸命勉強しているも周りは驚かないが、部活ばかりやっていたような生徒が突然勉強し始めたりすると、「自分もがんばらなければいけない」とクラス全体の雰囲気が変わることも多い。こつこつたムードメーカーが早く誕生すると、よい刺激となる。

個人面談などのときに「あの生徒が気合いを入れて勉強を始めたよつだ」とほめめかすと、聞かされた生徒のやる気に火がつくこともある。しかし、生徒の方がそつじつ状況を敏感に感じ取っていて、面談などの場で生徒から「彼(彼女)が始めたから、僕もがんばらなければ」といい出すことも多い。

雰囲気作りができれば、そのテンションを最後まで維持できるように持っていきたい。

## 進路指導

### あこがれ校への 夢は持たせ続ける

それまでの漠然とした「志望校」から、より入試を意識した「受験校」へと照準をはっきりさせる時期である。とはいえ、生徒の意識はまだ揺れ動いている場合が少なくない。特に成績中位層から下位層に「あこがれ校」をめざし続けるか、それとも志望を変えるか……といったように揺れる生徒が見られる。

受験校選択に対する姿勢・意識は生徒によつてかなり幅があるので、個別対応が中心になる。短い時間でもいいから個人面談の機会を多く持つようにしたい。

受験校決定までの指導で重要なのは「あこがれ校」をあきらめさせるような指導は避けるという点であろう。いつまでもなく、進路指導の要点は生徒の可能性を広げてやるということにある。たとえ成績的にその「あこがれ校」の合格が難しそつでも「その大学はやめた方がいい」といういい方はやはり避けたい。希望を持たせがばらせる一方、あこがれ校を失敗した場合の現実

的選択(併願校)を考えるようにしむきたい。

国立大の場合は受験できる数が決まっているので、併願パターンは慎重に検討する必要がある。

また、特に地元を離れた大学の受験については、保護者の理解を得ておくことも大切だ。遠く離れた大学へ通わせられないなど、保護者には子どもに希望どおりの進路を選択させることができない事情がある場合もある。早い段階で家庭内のコンセンサスを得るように生徒に伝えておきたい。教師も、保護者面談などで確認しておくことが必要だ。

## 11月～センター試験

### 学習指導

### 学習方法は 従来のやり方を継続

多くの受験生は、センター試験1か月前からその対策一辺倒になるので、それまでにある程度2次試験の実力をつける勉強をさせておきたい。夏休みなら時間を取つてじっくり考えるような勉強のしかたができるが、この時期

2学期当初は、生徒は皆少なからず不安を抱えているという前提で、個人面談などで精神面のケアと具体的な学習方法のアドバイスを行う

夏休みまでにどの分野の学習が済んで、どこが済んでいないかを踏まえて、2学期以降の学習計画を新たに立案させる

ケアレスミスをなくせばこれだけ伸びると成績の「伸びしろ」を見せ、やる気を引き出す

模試は受けっぱなしにしないで、必ず復習するよう指示する

焦って難問に取り組んだり、新しい分野に手を広げるのではなく、まずは基礎を固めるように指導する

それまでの国語、数学、英語中心の学習から、地歴公民や理科を加えた新たな学習計画を立てさせる

第1志望でないにもかかわらず、不安な気持ちから推薦入試に逃げ込もうとする生徒を励ます

クラスメート同士いっしょに勉強させ、クラス全体が受験に立ち向かうような雰囲気作りに務める

あこがれ校に向け努力しながら、現実的な併願校を考えさせるようにするため、個人面談など生徒への働きかけの機会をできるだけ持つ

特に遠く離れた大学を受験する生徒などは、受験校について保護者の了解を得ておく

### 指導のポイント(夏休み明け～10月)

になると精神的にそつじつ余裕がなくなか持てない。しかし、この時期は、今までやってきたことを整理して、安心させるような勉強だけではやはり物足りない。センター試験対策に入る前の11月から(場合によっては10月から)12月初めまでは、2次試験の力をつけるいい機会であり、じっくり考える勉強をさせたい。例えば、授業の演習などで少し手こたえのある、生徒に考えさせるような問題を織り混ぜていくとよい。センター試験1か月前になったら、その対策に集中する。

また、この時期になると2学期当初

に立てた計画が一段落して、次に何をしようかと戸惑う生徒が出てきて、ともすると新しい学習方法に挑戦してみようとすることがある。生徒によってはそのやり方で実力がつく場合もあるが、基本的には新しいやり方を試すより、今までやってきた学習方法を継続していくべきだろう。

志望校の過去問題集はこの時期に買わせておく。本格的に手をつけるのはセンター試験後だが、そのとき過去問題集を買おうとしても売り切れていて書店に置いていない恐れがある。特に、有名大以外の大学の過去問題集は、早



めに買わせておいた方が無難だ。

一方、計画どおりにいかなかった生徒の中には、「わずかにx日間」が完璧にわかる」といったたくいの問題集・参考書にすぎざる者もいる。しかし、安易な気持ちでそついった問題集や参考書ばかりに頼っていると、実力はなかなか伸びない。それよりも、学校の授業を中心に、今までやった問題集・参考書に継続して当たりながら学習するように指導したい。

毎年秋口に、その年に実施されたセンター試験問題に関する意見や評価が大学入試センターから出される。これには試験問題に対する高校現場などからの意見や評価と、大学入試センターの見解がまとめられているので、各教科の担当はそれに目を通して問題研究や指導に役立てたい。

### 進路指導

## 入試科目を踏まえた併願校決定を

受験校を最終的に決める時期。生徒

にはセンター試験で思いどおりの点数が取れた場合の第1併願パターンと、予想を下回った場合の第2併願パターンの組み合わせも最終的に決定するように指導したい。

受験校を決める際、2次試験の入試科目についても再確認しておく必要がある。例えば文系の場合、A大学は地歴公民を日本史で受験する、B大学は地歴公民を政治経済で受験する、というのは非効率的であり、リスクも伴う。ほとんどの大学で共通して受験できる科目(例えば日本史や世界史)に一本化して、その科目に勉強を集中させる方がよい。

センター試験と2次試験との配点比率を押さえておくのも効率的な入試対策を行ううえで大切だ。センター試験の比率がかなり高い大学を受験する場合は、通常より早めにセンター試験対策に取りかかるといった作戦も必要になってくる。また、各科目の配点がわかれば、各科目の勉強の強弱のつけ方も明確になる。

後期日程試験の受験についてもこのころから生徒に意識させておきたい。というのも、後期日程試験のことが頭

### センター試験後

### 学習指導

## 過去問中心の対策と答案の書き方指導を

2次試験対策や私立大対策では、受験校の入試問題を過去5年間分はすべて解いて、完璧に理解させておきたい。過去10年間も見れば、出題傾向はさらにはつきりしてくる。大学によっては出題分野がかなり限定されていたり、同じようなクセのある問題を出したりするので、過去の入試問題の研究は絶対に必要である。

答案の書き方についても、練習させておきたい。例えば、数学などでは、一つの問題について、解答用紙1枚すべてを使って書かせるといったこともある。したがって、自分の言葉で表現する練習は、文理を問わずどの生徒にも欠かせない。センター試験がマーク式のため、生徒は言葉で表現する勉強から遠ざかっている。答案の書き方を念頭に置いて、過去問を解くように指導していききたい。

問題集を使う場合は、新しい問題集に手をつけるのではなく、前から使っ

ていたものをもつ1度解くようにする。その代わり、解く時間をスピードアップするように意識させてみる。最初20分かかったら次は15分、10分で解くつもりで取り組む。そうしていけば、その問題についての理解の定着をよりしっかりとしたものができる。一つの問題を解いてそれで終わりにするより、同じ問題を繰り返し完璧にした方がはるかに効果があることを生徒には伝えたい。

いずれにせよ、センター試験が終わってから2次試験までには相応の日数があるので、対策を立ててそれをこなす時間はある。決して焦ったり慌てたりしないように生徒にはいつておきたい。また、「現役は最後まで伸びる」とをよくい聞かせておく。1年間通して常にいうべきことでもあるが、この時期にもいい続けて励ますことが大切だ。

また、センター試験が終了すると学校の授業がなくなるので、生活のリズムが崩れやすくなる。朝にきちんと起床して夜は十分に睡眠を取り、昼間に勉強するように指導する。夜型の勉強をしている生徒は、昼型へと戻しておく。本番の試験を意識して、その時間帯に学習サイクルを合わせていくようにしたい。

にないと、前期日程試験がうまくいかなかった場合、本人がそれであきらめてしまふケースが出てくる。前期日程で失敗した直後に、「後期でも可能性がある」ともう一度奮起してがんばるようにアドバイスしても、やる気をなくしてしまっているため、生徒は耳を貸さないことがある。最後まで可能性にかけるためにも、後期日程試験を意識させて2回目のチャンスも存在するということを理解しておくように指導したい。

国公立大の場合、センター試験終了までどの大学を受けるか確定しないので、いざ受験を決めたときその大学の願書を取り寄せていなかったということも起こりうる。願書については、受

2次試験を意識し、授業の演習などで、生徒に考えさせるような手ごたえのある問題を織り混ぜていく

特に有名大以外の大学を志望する生徒には、志望校の過去問題集は早めに買わせておく

学校の授業を中心に、これまで使った問題集、参考書に継続して当たるよう指導する

センター試験で予想を上回った場合、下回った場合のそれぞれの併願パターンをいくつか想定させる

できるだけどの大学でも共通して受けられる科目に1本化し、効率よく入試対策を行わせる

配点比率に目を向けさせ、各科目の勉強の強弱のつけ方を明確にさせる

後期日程試験の存在を事前に頭に入れておくように指導する

受験する可能性がある国公立大の願書は、センター試験の前にあらかじめすべて取り寄せておくように指示する

私立大入試では地方試験も考慮に入れた無理のない、効果的な入試スケジュールを組ませる

### 指導のポイント(11月〜センター試験)

### 進路指導

## 最後まで意欲を保たせる

私立大の入試とそれに続く合格発表の時期は、国公立大志望者にとっては意欲をなくしかねない時期でもある。私立大に合格すると気が抜けてしまつて、たとえ国公立大が第1志望でも、意欲と緊張感が薄れてしまつ生徒が出てくるからだ。そういう状況の中で後期日程試験まで生徒を引っ張っていくのはなかなか難しい。2学期後半から時間をかけて第1志望校へのあこがれをかき立て、私立大に合格してもその気持ちが揺らがないところまでテンションを高めておく必要がある。

また、保護者の意識も生徒に強く反映する。1年間受験勉強してきた我が子の姿がふびんになって、「合格した私立大でもいい」というようなことをいうと、生徒の意欲はいっぺんにそがれてしまふ。最後の受験まで生徒の意欲を保たせるように、あらかじめ保護者にお願しておきたい。

遠距離の大学を受験する可能性がある場合は、早めにホテルなどの予約を取っておくことも必要である。

験する可能性がある国公立大のものはセンター試験の前にあらかじめすべて取り寄せておくように指示する。

私立大については、入試スケジュールも考慮して受験校を最終決定する。例えば、受験慣れをしてから第1志望校を受験できるように、他大学の受験をその前にもつてくるなど、実践的にかつ入試日があまり連続していない無理のないものにさせたい。

また、受験機会を増やすために、地方試験を積極的に利用することも考えたい。同一の大学・学部を複数回受験できるチャンスがあることも多いので、特に設置大学数が少ない薬学や農学系などの学部・学科を志望する生徒に対しては、きめ細かく指導したい。

2次試験対策や私立大対策では、受験校の入試の出題傾向、解答様式に慣れさせる

センター試験後は学校の授業がなくなり、生活のリズムが崩れやすい。朝型の生活リズムを維持させる

併願した私立大に合格すると、意欲と緊張が薄れてしまうことも。第1志望校合格の意欲を最後まで持続させる

ホテルの予約などは余裕をもって行わせる

### 指導のポイント(センター試験後)